

京極導誉

京極家を近江守護にしたバサラ大名



▲京極導誉像／京都国立博物館蔵

導誉には、人生を左右する岐路が少なくとも4回あった。そのたびに、導誉は鋭い臭覚で有利な道を選んでいく。導誉の研究者である宇野日出生さんに、導誉の危機管理能力の高さを伺った。

導誉は情報収集力に長けていた

最初に、導誉に訪れた岐路は、鎌倉幕府に見切りをつけた時だ。隠岐に流されていた後醍醐天皇が脱出。これを知った鎌倉幕府は、後醍醐を捕縛すべく足利尊氏に上洛を命ずる。鎌倉から京へと、東山道を通る尊氏を導誉は近江の番場宿で供応。ここで2人は北条討伐を密約する。

しかし、そもそも導誉が仏門に入ったのは、北条高時の入道に合わせたことだった。それほど北条氏に臣従の意を示していた。にもかかわらず、後醍醐に付いたのは

なぜか。

「晩年の鎌倉幕府はどうしようもなかったんでしょね」と、宇野日出生さんは言う。導誉が本拠にしていた湖北は、古来交通の要衝で、さまざまな情報が得られる立地であった。しかも導誉は情報収集力に長けていた。

「南北朝期はひとつ間違えれば家が潰れてしまったから、家を守ることに必死だった」と宇野さん。尊氏と導誉は、鎌倉幕府の御家人として鎌倉で親しくしていた。「夜な夜な密談していたのではないでしょうかと」も。



▲京から鎌倉へ逃げた北条仲時等4百人余が蓮華寺で自刃。境内に墓がある

後醍醐を除かざるを得なくなる

次の岐路は、後醍醐天皇を見限った時だ。鎌倉幕府を倒した後醍醐は、京都に新政権を樹立するが、この建武政権は極端な天皇独裁政権だった。だから武家にとつては少しも旨味がなかった。

後醍醐の諱（名前）である尊治の頭文字を賜り、「高氏」を「尊氏」と改めた足利尊氏だったが、建武政権を無視し、自分に従う武家に恩賞として領地を安堵する（保障すること）。怒った後醍醐は、新田義貞を大将とする討伐軍を派遣する。

「天皇は座つてただけでいいんですよ。でも後醍醐は自分ですべてを仕切ろうとした。武士は綺麗ごとでは済まないんです」と宇野さん。尊氏たちは後醍醐を除かざるを得なかったわけだ。

それに導誉も同調。むしろ、尊氏に積極的に武家政権の樹立を働きかけた。戦は一

尊氏の策略の陰に導誉あり

進一退を繰り返したが、最終的には尊氏が光厳天皇を奉じて入京。北朝が成立し、後醍醐は吉野へ逃れる。南北朝時代の始まりである。

第3の岐路は「観応の擾乱」での対応だ。

室町幕府の初期、権力は足利尊氏と弟の直義に二分された。尊氏は恩賞給付を軸とした支配権を持ち、直義は裁判権を中心とした支配権を持った。この二頭政治は複雑な利害関係を生み、幕府内が真っ二つに分かれて骨肉の争いを演じることになる。

「尊氏と直義は家来同士の仲が悪かった」と宇野さん。家来同士が喧嘩をして家を滅ぼす例は多い。源氏も織田も豊臣もそうだ。多くの武将にとって、どちらに付くは重大問題。一歩誤れば奈落の底だ。幕府で外様の立場にあった導誉は、ここでも尊氏に賭けた。

この間、京を奪い合ったり、南朝を味方に付けたりと、政権の行方は猫の目のように変転する。なんと室町幕府が南朝に降伏するという事態も生まれる。南朝の年号をとって、「正平一統」と呼ばれるのだが、これは尊氏が直義追討のためにおこなった便宜的措置。この策略を進言したのが導誉だった。彼の面目躍如といったところだ。

「導誉は相当のくせ者ですよ」と宇野さん。

最後の岐路は幕府での権力争い

だ。直義一派を一掃した尊氏は、南朝との和睦を破棄し、北朝の再建に取り掛かる。導誉は公家との太いパイプを生かしてめざましい活躍を行う。

だが外様だった京極氏にとって、足利一門である細川氏や斯波氏は厄介な存在だ。彼らと暗闘を繰り返すのだが、最たるものが斯波高経と細川清氏の追い落としだ。自分が仕掛けなければ相手にやられる。將軍への讒言（陥れる為の悪口）という手で、障害となる有力守護を開放してしまう。このようにして、室町幕府で権力の中枢に座るのである。

（西岳人）

参考文献

森茂暁「京極導誉」吉川弘文館
林屋辰三郎「佐々木導誉」平凡社



▲観応の擾乱で戦いの場になった八相山(虎御前山)。矢合神社がある



▲宇野日出生さん
滋賀県生まれ。栗東市の小槻大社宮司。
長浜市文化財保護審議委員。令和3年
3月まで京都市歴史資料館研究員